

廃液処理微生物で

東武商事が大規模施設

来春稼働

産業廃棄物処理の東武商事（埼玉県吉川市）は2019年3月、微生物を使った廃液処理施設を稼働させる。ジュースや牛乳などの製品廃棄物が対象で、1日の処理能力は300立方メートルと国内の産廃処理業者としては最大級。東日本を中心に受け入れる計画だ。

同社は吉川市と松伏町にまたがる東埼玉テクノポリス工業団地に、約80億円をかけ産廃処理の総合施設「松伏スマート・リサイクル・システムズ」と「吉川スマート・リサイクル・システムズ」を建設中。廃液処理施設は松伏の一角に設ける。

廃液はバクテリアで分解・浄化する。廃液処理には微生物処理と、高温の焼却炉の中に廃液を噴霧する焼却処理があるが、微生物処理は焼却処理に比べて費用が3、4割安くなるという。ただ、バクテリアが活発に働くよう廃液の濃度を調整す



建設中の廃液処理施設などが入る建物（埼玉県松伏町）

られるようにする。緊急時の対応で信用を得て、顧客拡大につなげる狙い。

同社の17年6月期の売上高は約45億円。小林増雄社長は「大企業も産廃関連の事業を拡大しており、積極的に投資していく必要がある」と説明している。

る技術が必要だ。

国内で自然災害が相次いでいることを踏まえ、吉川、松伏の施設では被災企業などからの急な引き取り要請にも応じ